

領域 8 インフォーマルミーティング

開催日時: 2017 年 9 月 23 日 12:30 - 13:30

開催場所: 岩手大学 F11 会場

出席者

領域代表 (任期: 2017/4 - 2018/3)

常次宏一 (東大物性研)

領域副代表 (任期: 2017/4 - 2018/3)

吉村一良 (京大理)

運営委員 (任期: 2016/10 - 2017/9)

本多史憲(東北大金研), 笠原成(京大理), 赤城裕(東大理), 鮎川晋也(岡大基礎研)

運営委員 (任期: 2017/4 - 2018/3)

村川寛(阪大理), 道村真司(埼玉大), 岡本佳比古(名大工), 今井良宗(東北大理),
速水賢(北大理)

13 : 30 頃の出席者数 : 20 名程度 (上記を含む)

1. 2017 年秋季大会サマリー

1.1. 講演数

・ 総件数: 512 件 (cf. 2016 年秋@金沢大: 612 件)

[低温] 口頭 : 217 件, ポスター : 119 件

[磁性] 口頭 : 70 件, ポスター : 106 件

・ 秋季大会としては少ない講演数であり, 磁性の講演数が減少している.

・ 4. の議題と関連する学生の発表数については半分以上を占めた.

[学生] 口頭 : 146 件, ポスター : 147 件, 合計 : 293 件

[一般] 口頭 : 126 件, ポスター : 65 件, 合計 : 191 件

1.2. プログラム編成

(1) シンポジウム日程

・ 今回は領域 8 主催のシンポジウムは無かった. 近年, 3 件の募集枠に 4 件応募があつて 1 件不採択になり, その次の学会では応募が 0 件ということが続いているので, 発表者の都合もあると思うが, 上手く調整できるとよい.

(2) 口頭発表

・ 低温は講演件数が多いため, パラレルセッションが生じてしまう.

・ 磁性はポスターセッションとのパラレルセッションはあるものの, 口頭発表数が少な

ったため、比較的プログラムを組みやすかった。

- ・ 低温の発表が多い傾向があり、プログラム編成の負担に偏りがあるかもしれない。

(3) ポスター発表

- ・ 今回は他領域との日程調整が必要であった。講演件数としては2セッション分ほどであったが、シンポジウム日程との兼ね合いがあり、磁性のポスターを2回に分割した。毎回3セッション分要求しているため、問題はなかった。

(4) 合同セッションについて

マルチフェロの発表については、春には領域3、秋には領域8が担当するというのが慣例らしいが、2017年春は、その慣例が曖昧なまま領域8が担当した。今大会も領域3よりプログラム編成をお願いされたが、合同希望の講演数が多かったため、領域3が自主的に半数のプログラム編成を担当し、残りの半分を領域8が担当した。したがって、2018年春のプログラム編成時には、まず、領域3にマルチフェロのプログラム編成を担当してもらうよう、お願いすることが申し送り事項となる。

1.3 領域委員会 (2017年5月開催) 報告

(1) 秋季大会における企画プログラムの承認

- ・ 領域8の件数: 招待講演1件、企画講演1(+1)件、他領域との合同シンポジウム0(+4)件 (括弧内の件数は他領域と合同の件数を表す)

(2) 物理学会シンポジウムについて

- ・ 特定の研究グループの発表の場としないようにする制限は続けるものの、2018年3月からは、代わりに共催シンポジウムを行うことができる(詳細は(5)を参照)。
- ・ これまで占有時間は最長で3.5hであったが、希望すれば4hへの変更が可能になる。ただし、プログラムの編成上、午後にしか組めなくなるので注意。

(3) 若手奨励賞の受賞者上限数

- ・ 領域8は5名。

(4) 学生優秀発表賞実施要項の改定案に関する説明と議論

- ・ 改定案の承認には至らず、各領域で再び議論する運びとなった。2018年3月の年次大会より施行するスケジュールは2018年秋以降に延期。

(5) 物理学会における「共催シンポジウム」枠の新設

- ・ 研究コンソーシアム(競争的資金の研究グループなど) から資金提供を受け、通常のシンポジウムとは別枠で設ける。
- ・ 関連領域から通常のシンポジウムと合わせて優先順位を付けて提案し、領域委員会にお

いて審査する。

- ・特に反対がなかったため、実施される見込み。2018年3月の年次大会から開始予定であるが、周知に時間がかかるため、遅延する可能性あり。

2. 次期領域運営委員(任期:2017/10-2018/9)の紹介

低温: 下志万貴博(理研 CEMS), 星野晋太郎(理研 CEMS(10月より埼玉大))

磁性: 松岡英一(神戸大理), 品岡寛(埼玉大)

3. 次々期領域運営委員(任期:2018/4-2019/3)の推薦及び承認

- ・各運営委員(任期:2017/4-2018/3)からの推薦

低温: 深澤英人(千葉大院理), 中島正道(阪大院理), 矢島健(東大物性研)

磁性: 山川洋一(名大院理), 川崎郁斗(兵庫県立大院物質理)

- ・拍手をもって全員承認された。

4. 日本物理学会学生優秀発表賞について

一部の領域において、学生発表賞や学生奨励賞などに「日本物理学会」の名を冠した授賞が行われているが、日本物理学会の立場としては、そのことに責任を持っていない。また、履歴書の受賞歴などへの記載に対して日本物理学会へ問い合わせがあったとしても、回答を持ち合わせていない。このような現状の改善、若手の奨励および大会の活性化を目的として、日本物理学会が学生優秀発表賞を新設。領域8としての最終案は2018年3月のインフォーマルミーティングにおいて認可する必要がある。

4.1 学会へのフィードバックおよび質問事項

日本物理学会学生優秀発表賞を設立することに対してのフィードバックが要望されているため、以下のように議論を行った。

(Q1) 物理学会全体の賞として「日本物理学会学生優秀発表賞」を制定することについての意見

運営委員の事前協議

- 現在の実施要領においては領域毎で独立の審査であり、現状の実施要綱では“日本物理学会”と冠する賞としては領域毎の差が大きいのではないかと危惧する。
- 審査に関してもう少し基準を明確にしていきたい。

参加者からの意見(運営委員含む)

- ・一部の領域においては、業績に対する若手奨励賞を授賞していたが、日本物理学

会が新設する賞は「発表賞」である。業績を含めるように拡張する可能性はないのか打診したところ、種々の問題があるため難しいが、多くの領域が共同意見として提出すれば、可能性が無いわけではないという回答。

- ・ 業績を審査に用いるのは問題無いが、発表ではなく業績を主として審査するのは、学会としては困るという旨の回答があった。
- ・ 領域 8 という名前は、どこにも出ないのか？
→ 質問する予定。
- ・ 素核宇の分野では実施しない(独自の賞がある)。領域 3 は以前より「学生奨励賞」を授与している。

(Q2) 各領域に候補者推薦をお願いする形式に対する意見

運営委員の事前協議

- 領域毎の推薦は合理的であると思うが、その領域における全学生発表者数の何%程度などの目安を決めてもらえないか。

参加者からの意見(運営委員含む)

- ・ 決めてもらうのではなく、領域において決定すべきではないか。領域 5 では、3 年前からポスター限定の発表であったが、領域で何%と決定していた。そのくらい決められないようでは、領域としての存在価値があるのか、と個人的に思う。
→ (領域 5 では) 目安で何%と決まっていたか?
→ 応募者に対して何割といった決め方。
→ 領域 7 は 5%と決めている。
- ・ 学会としては、率先して賞を導入するわけではなく、領域毎にバラバラな現状を收拾するために賞は新設するが、各領域の自主性に任せたい、というスタンスであるため、人数は定めていない。
- ・ 各領域であまりにも受賞人数に違いがあると、人数を定める可能性もあるかもしれないが、運用しながら最適の人数になるという気がしている。

⇒ 「領域毎の推薦は合理的であると思うが、その領域における全学生発表者数の何%程度などの目安はあるか」という質問に変更。

(Q3) 特別な予算は用意しない予定ではあるが、仮賞状を発行する許可についての意見

運営委員の事前協議

- 仮賞状は制度上発行できた方がよい。

参加者からの意見(運営委員含む)

- ・ 領域 8 で印刷して用意することになるのでは.

(Q4) 上に述べたような形で賞を制定した場合、領域として受賞者推薦を行うかどうか

運営委員の事前協議

- (前回のインフォーマルミーティングで議論しているが) 領域 8 としては前向きではないものの、受賞者推薦を行う方向で検討している

参加者からの意見(運営委員含む)

- ・ 上手くいくイメージが湧かないため、(推薦を行うことに)あまり賛成ではない。特定の有力グループで占められた場合に、目的である学生の奨励や大会の活性化につながるのだろうか? 誰にでも受賞の機会があるという方がよい。
 - ある程度の受賞人数を確保できれば、所属の偏りもなくせるのでは。
 - 運用を進める上では、有力グループの学生を選出せざるをえないこともあるはず。
- ・ (放射光学会などで起きた類似のケースを考慮すると)最初は上手くいかないのは覚悟するしかない。運用しながらよい方法、持続可能な仕組みを構築していくしかない。
- ・ 盛り上がっていく方向だとよいが、限られたグループの学生が数人しか受賞できないのだと認識されると、その他のグループの学生が萎縮して申込者数が減少していかないか。
 - 審査する側の力量が問われる。若い人ではなく、上の世代の審査員が問題なく審査できるかにかかっている。

(Q5) その他の意見、疑問点

運営委員の事前協議

- 受賞者がどの領域からの推薦であるかも発表されるか?
- 領域のルールとして受賞回数の制限は可能か?
- 応募者多数の場合、事前審査を概要や発表論文などを基に行ってもよいか
- 共通の選考基準さえ策定できないのは、物理学会全体の賞というよりは、領域毎の賞と変わらないように思う。

参加者からの意見(運営委員含む)

- ・ 同じ人が何度も希望し、(回を経て審査の)作業量が発散しないか?

○ 審査方法について

日本物理学会の実施要項案が変更された場合には、大きな変更を迫られることになる

が、来年の実施に向けて領域 8 としての具体的な候補者決定方法を話し合っておく必要がある。

A 案 発表賞審査のための特別セッションで発表を行う

運営委員の事前協議

- 審査の公正性は高い
- 事前審査を行う場合はプログラム編成前に審査結果を出す必要がある
- 学術講演会において適切か

参加者からの意見(運営委員含む)

- ・ 本来のセッションとは異なる講演発表の流れなのでよくない。

B 案 応募者は通常セッションで発表を行う

運営委員の事前協議

- 多少の配慮は必要であるが、通常通りのプログラム編成を行える。
- 公正性を担保しようとするとして 1 件あたり 3-5 名の審査委員が必要。

参加者からの意見(運営委員含む)

- ・ ビデオ審査はどうか？
- ・ 別日程(夜間など)での審査はどうか。
 - (個人の)複数の発表にならないか。
 - 制度の問題だが、不可能ではない。
 - 発表賞と言えるのか？ 対象は一般の発表についてでは。
- ・ 事前の推薦ではなく、プログラムを組んだ後にセッション毎に受賞者を選出してはどうか。
- ・ 審査員の方々は、ずっと居る必要があるので、審査を承諾してもらえるか？
- ・ 審査員の割当ては、A 案では一つのセッションに半日居ればよいので単純だが、B 案では出席しなければならないセッションが多いので(各審査員の事情(自研究室の学生の発表など)を考えると)複雑になる。
- ・ 負担は増加するが、座長に審査員を割り当てる方法はどうか。
- ・ 口頭発表のみを対象としているのには反対しないが、ポスターセッションであれば、より実行しやすい。
 - 口頭発表の方がしっかりしたデータの発表であろう、ということで口頭発表を対象にしているが、ポスター発表の案を完全に除外しているわけではない。

- ・ 審査委員会を結成して相当上手くやらないと，A, B 案いずれにしる，(領域 8 は人数が)多いので，持続できるのか疑問.
- ・ 審査は現実的に無理と割り切って，領域 8 では行わないというのも一つの解では.
- ・ (候補者が発表する)セッションに居る教員すべてが審査員になり，投票を行っては. (審査員の)負担は軽くなる.
→ 一つのセッションに候補者が 1 名の場合があるため，いくつかのセッションを回る必要がある.
- ・ 何人かの先生に個人的に審査員を打診したが，返事が芳しくない. A 案であれば審査員の半分を運営委員にすることも可能.

○ 受賞者の人数について

- ・ 現状では上限 5 名に設定.
- ・ 学生の発表者数は 150 名程度. そのうち 5 名というと敷居が高いか.
- ・ 領域 1 は 10 名ほど，領域 3 は 3 名，領域 7 は 5%.
- ・ 毎回，変更は可能.

現段階では，これ以上議論を深めることが難しく，終了時刻も迫ったため，今後に持ち越すことになった.

以上 (文責：鮎川)